

疾風怒濤の格好つけ

柳野 守利

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

出来損ないだけど、格好つけたかった。

ただそれだけの、少年たちの話。科学の発展した未来で生きる、小さなヒーロー物語。

この作品は小説家になろう様、カクヨム様でも掲載されています。

目次

序幕	1
ヒーローになってみよう	13
不格好に足掻け	25
仮面	34

序幕

小さかった頃の母の言葉を、未だに忘れられずにいる。ちゃんと産んであげられなくてごめんね、という……聞くに耐えない言葉だった。いや、母は優しい方だろう。産まれてきた子どもに、当たり散らしたりしないだけ。聞けば、多くの自分のような人は酷い仕打ちを受ける場合が多いらしい。

……日常的に、そうではないと自分は言いきれないけど。でもきつと、逆なら自分もそうなるんだ。こんなのがいても、なんとなく不快になるだろう。一緒にいたくはないだろう。意味もなく気持ち悪がるだろう。

皆が当たりくじを引く中で、自分はハズレくじを引いた……いや、逆かもしれない。確率的に、当たりはこつちなんだ。施術の成功率は、今の時代じゃ九割とんで九分九厘。学校に一人、いるかいな。そんな程度の人数だ。

『できそこない』が何を言おうが、真つ当な扱いはして貰えない。こんな自分は嫌だ。こんな顔は嫌だ。こんな存在は嫌だ。

何をやってもし上手くない。何をしても、誰にも勝てない。皆が着てる服も似合わない。将来の夢なんてものは持ち合わせていない。

何も、高尚なことは望まないから。ただせめて……好きになってしまった女の子の前でくらい、格好つきたい。『ダスク』だろうと、それくらい望んでもバチは当たらないだろう。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

日本という国には、二種類の人間がいる。優秀な人間と、そうでない人間。かつて労働社会と腐った政治家による廃退を思わせていたこの国は、ある時を境に目まぐるしい変化を遂げていくことになった。

技術の革新。イデオロギーの変位。凝り固まった世代は老いていき、やがて新たな世代が国を動かしていく。そこにかつてあった日本人の心はなく、徐々に侵食していった新しい精神が形作られていった。

種の繁栄だけでなく、質を高めようとしたのだ。遺伝子操作による赤子の平均能力の向上化。足が遅い、勉強が苦手、などといったものは既に個性ではなくなった。均一した性能と、突出した才能。苦手な部分を排除し、社会への適応としてストレスへの耐性もつくようになっていく。それを技術が可能とした。

だが、何事も失敗というものはある。遺伝子操作の成功率は極めて高かったが、失敗

して全てが反転してしまう赤子も出てきた。才能に恵まれず、ストレスへの耐性もなく、平均能力も低い。彼らは『ダスク』と呼ばれるようになった。ほとんど蔑称のようなものだ。

前の日本と同じように、イジメの対象になりやすく、社会に貢献することも難しい。出来損ないのダスク、と呼称されることも珍しいことじゃなかった。

ならそんな施術しなくていいのでは？ ピーキーだろうと、欠陥があらうと、施術をせずに産めばいいじゃないか。そう答える親もいるにはいた……が、答えなんて決まってるだろう。皆がやってる。そんな中で自分の子だけそうじゃない。それはなんか嫌だ。だってそれが当たり前の世の中だ。

それに……自分の子には、いい未来を歩ませてやりたいものだろう。それが親の気持ちというものだった。

そして今日もまた、街のどこかでダスクにとつて苦痛の日々が始まる。路地裏で、スーツ姿の男性が蹲っていた。傍らには三人ほど男が立っている。着崩したスーツの彼らは、同僚なのだろう。蹲る男の頬をペチペチと叩いては笑っていた。

「ほんつとお前さあ……仕事はできねえ、気配りもできねえ。挙句の果てには嘘ついて誤魔化そうだあ？ 自分がどれだけ迷惑かけてんのか、考えたらどうなんだよ、ああ？」
「ダスクの尻拭いばっかささせられて、こっちも困るんだよなあ……。代わりなんていく

らでもいるんだし、とつとと辞めてくれた方が楽になれるんだけどよ」

蹲る男の目に、生氣はない。そもそも昔からこんな扱いだった。そんな諦めのような気持ちか体の中で渦巻いているのだろう。すみません、と言葉を零す。だが彼らの燻る嫌悪感というのはなくなりはいしない。

「謝ったところでどうにもならねえだろ、ええ？」

「やめとけやめとけ、所詮はダスクだ。一般人にできることすらできないって、産まれた時から決まってるんだよ」

詰め寄りもせず遠巻きに見ていた三人目が、煙草に火をつけながら言う。『そういうものだ』と。

「だからって、俺たちがこんな野郎の尻拭いなんざごめんなんだよ！ お前もそうだろう!?」

「今に始まったことじゃないしな。まあ……押し付けた人事部には多少怒りたくもあるけど」

「……ご、ごめんな、さ……」

「ああもううつせえな！ 謝るくらいなら何もすんなつつの！」

側にいた二人のうち、ピアスをつけた男がダスクと呼ばれた男を蹴り飛ばす。蹲っていたところに、更に腹を蹴られ。男は路地裏で横たわったまま微振動を繰り返すだけと

自宅へと帰っていく。

駅前の広場は人でごったがえし、前後不覚に陥りそうになるほど。そんな人々の耳に届くのは、高層ビルにつけられた大型ディスプレイの音声。時刻を告げる放送が流れていた。

『間もなく、時刻は大禍時おおまがときとなります。速やかに帰宅し、自分や家族の身を守りましょう』

大禍時。黄昏時を超えた先の時間。世に蔓延る『獣』の時間だ。日本の発展と共に出現した、化物。『シエイド』と呼ばれるもの。夜間にどこからともなく現れては、近くにいる人に襲いかかると言われている。それが出現する時間よりも前に帰ることが義務付けられていた。そして夜間の外出は禁じられる。破った者の末路は……言うまでもない。

基本的に日中には現れないとされている。基本的には、だが。

「だ、誰か助けてくれえっ!!」

路地裏から悲鳴とともに走り出てきたスーツの男。大通りまで走って、転ぶ。地面にタバコの箱から出た中身がぶちまけられた。一部が血で染まっている彼の姿を見て、近くにはいた人々はどよめき始める。何が起こったのかと聞く前に、彼は声を荒らげて周りの人間に言い放つ。

「シエイドだ！ シエイドが出たんだ！ 早くここから離れろ！」

シエイド。その名前を聞いたただけで、我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げ出した人々。男が来た方とは別の場所へと逃げていく。ただ、時間帯が悪かった。大禍時になる少し前の時間。人が一番混雑する時間だ。逃げようにも人の多さに足を取られ、体はぶつかり、上手く逃げようにも逃げられない。

血塗れたスーツ姿の男は叫ぶ。

「シエイドだ！ シエイドが出たぞ！」

危険だと叫ぶ。逃げ惑う傍らで、どこにシエイドがいるのかと何人か振り返った……が、彼らの視界にシエイドの姿は確認できない。

血塗れたスーツの男の近くにいた男性が、男に問いかける。どんな姿をしていたのか。どこで見かけたのか。それらを対 Anti-Shade Force シエイド戦闘部隊——ASFへと通報するために。

「シエイドだ！ シエイドがそこから来るぞ！」

しかし男は慌てた顔つきのまま、その言葉を繰り返す。それを見て怪訝に思った。本当にシエイドがいるのか、と。時折いるのだ、不謹慎な輩が。シエイドがいるなどと嘘をつく奴が。

だが血濡れている姿から察するに、嘘とは思えない。逃げながら詳細を聞こうとする

が、男は路地裏を指さして言う。

「シエイドがそこから来るぞ！」

「……来るようには、見えないけど」

そもそもまだ大禍時じゃない。なのにシエイドが出た。本人は錯乱しているのか、同じような言葉しか繰り返さない。焦燥感と正義感に駆られ、男は血塗れたスーツに掴みかかると、強く揺すった。

「ハッキリしろ！ 一体どんな奴なんだ！」

「シエイドが……そこ、から……」

じんわりと汗をかいていたスーツの男の顔が、歪む。顔の中央に横一文字の線が浮き出てきた。

「……えっ」

開く。唾液にまみれた顔の断面が、彼の見た最後の光景だった。中心から大きく開いた別の口。それが男の頭を丸かじりにしていた。

近くにいた人々は、そのあまりに異様な光景に思わず足を止める。シエイドだと叫んでいた男は、肉塊に喰らいつきながら姿勢を低くしていった。四足の状態にまでなると、やがてスーツが刺々しい毛のようなものへと変わっていく。顔は全て黒く染まり、同様の毛皮に包まれる。細くなった目、尖った耳、大きく開かれた口と牙。棍棒のよう

な大ききの尻尾。血と唾液が滴り落ち、口の中身を飲み込んだあとで空に向かって吼えた。

耳をつんざくような遠吠え。鼓膜が破れそうになり、身をすくめてしまう。

「ひっ……人に化けてた……!?!」

シエイドの生態は明らかになっていない。先程まで人の姿をしていたシエイド……その姿は狼に酷似していた。大ききは並のものではない。軽自動車と遜色ないほどの巨軀。それが忽然と彼らの前に現れたのだ。

「A、ASFを呼べ！ 早くっ！」

逃げる。しかし人の体の大きさと逃げ足で、ソレに適うわけがなかった。近くにいた人の集まりに向かって跳び上る。ソレが体に乗れば、骨は容易く折れるだろう。そして無惨に喰われるのは想像に難くない。

ソレが視界の上部を覆い隠そうとした時、死ぬのだとわかった。反射的に腕で顔を隠そうとする。

『変身ッ!!』

しかし……いくら待てども、重さは感じない。のしかかってくるはずだったあの化物は、自分の身に落ちてくることはなかった。代わりに聞こえてきたのは、男の声。

遠目から見ていた人々が、その巨軀が弾き飛ばされたことを確認する。人並みの大き

さの、黒い物体のようなものに。スカーフのように首元に巻き付けられた黒のマント。全身黒一色のコートのような服。そして被せられたフードの下にある、仮面。嘲笑するピエロのような、真つ白な仮面だ。涙の跡がついているように、水色の斑点がある。

「昼間から堂々と人喰いか……度し難いな」

全身黒服で仮面の男。それがあの化物を容易く蹴り飛ばしたのだ。どこからともなく颯爽と現れ、人々を救わんとするその姿。今まさに世間を賑わせる、時の人。

遠巻きに見ていた人々は歓喜した。ASFの到着よりも早く、彼が来てくれたのだと。

「ここから離れろ。この獣は、俺が引き受ける」

仮面の男は恐怖に怯える人々を守るように立ちはだかる。獣は姿勢を低くし、いつ噛み殺そうかと、虎視眈々と狙いを定め始めていた。

『舞台の幕が上がる。物語の終わりは、締切という死神によってもたらされるものだ』
黒服が右手を振るうと、その手の中に背丈よりも大きな鎌が現れた。緩い黒服に、鎌。まるでおとぎ話の死神のような姿。けれども彼はヒーローだ。

デパートで行われるヒーローショーのように、大仰な仕草で服をはためかせる。獣を挑発し、恐怖に脅えていた人々を勇気づけるような魅せる動きを繰り返す。

鋭い爪による攻撃も、ひらりひらりと躲しては「止まってみえるぞ」と言い放つ。時

には宙返りで攻撃を避け、空中で回転するように鎌を振るう。その一挙手一投足が演技のように思わせる。しかしこれが彼だった。

無駄に洗練された無駄のない無駄な動き。ただの格好つけだ。

「羨のなっていない犬だ。飼い主からまともな扱いをされなかったんだらう」

飛びかかってくる狼の攻撃を鎌で受け流す。その重さを感じさせない軽快な動きに、人々の心は徐々に掴まれていく。自動車ほどもあるあの大きな体軀を蹴り飛ばせるだけの力がどこにあるのか。それを観衆に魅せつけるだけの胆力。人並外れた技だ。

『その身に宿した赤ずきん。肉塊は石へと変質した』

俊敏な動きを見せていた獣が、急に勢いをなくす。跳び上る高さも低くなり、尻尾は地面を引きずり回される。彼の紡いだ言葉が、呪いとなって獣を押しさえつけていた。

鈍くなった獣の爪撃を鎌でいなし、懐に潜り込んで蹴り飛ばす。獣は街灯に衝突してようやく動きを止める。

「化けた狼は、通りがかった猟師に殺される……まあ、さほど変わらないだろうさ」

ゆっくりと歩み寄り、そう告げる。その鎌が獣の命を刈り取るまで、彼のパフォーマンスのような動きは続いた。首が転がり、地面に黒の液体が染み込んでいく。それらはやがて黒い煙となり、跡形もなく消え去った。絶命した獣が消えていくのを確認すると、大きな鎌を手元でクルクルと回してから消滅させる。

「これにて……此度の舞台は幕引き。大禍時となる前に、ご帰宅を」

まだ残っていた人々に向け、仰々しくお辞儀をする。そして拍手と声援を背中に受けながら、彼は颯爽とその場から跳び上がり、ビルの合間へと消えていった。

いつからか人々を影から救い始めたヒーロー。それが『ダスク』の少年だとは、誰も思いはしなかった。

ヒーローになつてみよう

少年にとって、日々というのは苦勞の連続であつた。出来損ないと称されるダスクの名は、いつまでも、どこまでも付き纏つてくる。それを気にせず生きていける世界ではない。

だが、生きていかななくてはならない。いくら朝が気怠くても、数度鳴り響くアラームが目覚ますように告げてくる。ベッドからもそもそと起き上がり、眠たげな眼を擦つた。目が隠れるほどの長い髪の毛は、寝癖をつけずに整つたまま。長髪は朝が少し楽だ。直毛なのも幸いしているが。

そして部屋から出て向かうのは、隣の部屋。扉の前で数度ノックする。

「ユキちゃん、朝だよ」

妹——雪音ゆきねに呼びかけるが、返事はない。もう一度叩いて、名前を呼ぶ。するとくぐもつた呻き声のようなものが返つてきた。

「うぐあ……うるさい……昨日外人にstupidとかloorって煽られたから起きる気しない……」

「……煽り？」

「兄には関係ないよ……早く学校行けば……」

それっきり、部屋の中から言葉が返ってくることはなかった。ドアの隙間からは涼しい風が流れてきている。部屋の中は快適らしい。

妹に関しては、よくあることだった。若干の罪悪感を覚えつつも、少年は二階から一階に降りていく。リビングでは既に朝食が作られており、母親が仕事に行く準備をしていた。

「おはよう、緑夢^{ぐりむ}。お母さん、もう出ないといけないから。昼ごはんは冷蔵庫にあるって、ユキちゃんにも伝えておいてね」

「……うん。いつてらっしやい」

既に家を出た父とは違い、少し遅めに母も仕事に向かう。起きてこない妹の携帯に昼飯のことを送っておき、少年——如月^{ごとつき} 緑夢は朝食にありついた。目玉焼き、レタスとプチトマト。そして暖かな味噌汁。健康的で軽い食事。それらを腹の中に入れ終わると、食器を片して制服に着替えていく。

黒のワイシャツが彼の高校では着用される。地味な自分には、水色や赤色なんて似合わない。そしてズボンにシャツを入れる必要も、彼の学校にはない。昔と比べると、随分と規制緩和がされていた。

「ユキちゃん、行ってくるよ」

相変わらず返事のない妹に行つてくると告げ、暑くなりつつある外へと出ていく。馴染みある住宅街を抜けて、学校へ向かうのはもう慣れてきていた。徒歩で十数分もかからない位置にある、丘の上の高校。京葉高校、巷ではケイヨーと呼ばれている。彼はケイヨーの二年生だった。

今ではそう見かけることもない、ダスクという肩書きを持つ彼にとつて学校は……いや、どこにいても、自分はここにふさわしくないのだと、そう思わざるを得なかった。

〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃

いつも通りの授業風景。何を言っているのかさっぱりわからない。数学なんて、特に。微分だの、積分だの、とんちんかんだった。必死に頭を悩ませるが、なんとか問一が解ければいい方。高校まで義務教育になっていなければ、もうとつくに学校とはおさらばしていただろう。

「じゃあ次の問題は……如月くん、解けますか？」

「あつ……いえ……」

若い男の先生に名指しで問題を解くように言われたが、解けるわけがない。周りからはくすくすと笑う声が聞こえてくる気がした。それが嫌で、黒板から目を背ける。窓の

外へと視線を向けると……反射して、教室の中の光景が映っていた。

目が隠れるくらい長い髪の毛。暗い顔をした少年。対照的に明るい学級。まるで異物のようだった。席替えも、ダスクだからと一番後ろにされている。どこまでいっても、この扱いだ。昔から変わらない。

「なら、次は結月^{ゆづき}さん」

結月。その名前を聞いて、胸が少し高鳴る。教壇に登って問題をスラスラと解いていく、髪が腰元まである女の子。眼鏡をつけたかわいらしい女の子。昔からよく知っている、女の子。

「はい、正解。よくできました」

彼女はどこか嬉しそうに口元を歪めながら、自分の席へと戻っていく。邪魔になりそうない髪も、彼女のことをよりいっそう際立てていた。

(……すごいなあ)

かわいく、気立てもよく、評判もいい。そんな幼馴染の姿を見ると、相変わらず昔っから心臓が暴れて仕方がなかった。率直な感想を述べれば、好きだ。けどそれは結ばれるわけもないだろうと思っっているし、不釣り合いだとも思っっている。

まあ、彼女がいるという理由でこの高校を選んだ時点で、諦めもクソもないことは自分がよくわかっているのだが。

人気がない路地裏を、彼はひたすら走り続けていた。息を切らし、足がもつれ、それでも必死に。片手に鞆。片手にコンビニ袋を持ったまま。

「はあ……っ、はあ……」

アイスを買いに来ただけなのに。大通りにチンピラみたいなのがいて怖かったから路地裏を通っただけなのに。いつものようにこの世の全てを憎んでいただけなのに。どうして。

(け、携帯……ASFの番号っ……!!)

鞆から携帯を取り出そうとする。ASFを呼ぶ理由なんてひとつしかない。今まさに、壁を高速で伝ってきている大きな化け蜘蛛のようなシエイドから助けをもらうため。

人気がないのは、コイツが喰っていたからだ。建物の間を通っていたら、ぼつりぼつりと雫が垂れていて。何かと思つて上を見あげたら……大量の白い繭のようなものが、吊り下げられていた。その繭からは人の手足や、時には顔が飛び出していたりする。白目を剥いているその顔は……恐怖に歪んでいて。喉元からはヒユイツと小さな悲鳴が漏れた。

そして背後に気配を感じ、振り向くとそこに奴がいたのだ。身の丈の倍はありそう

な、蜘蛛が。

(なんでシェイドが……大禍時じゃないのに……!!)

逃げながら、また世界を恨む。なんとか携帯を取り出したが、ふと気づく。無理じゃね、と。ASFは呼べばすぐすつ飛んでくるとはいえ、数分はかかる。その数分で自分は死ぬ。足が遅いから、すぐに追いつかれるだろう。大通りに逃げたくても、道が蜘蛛の糸で塞がれていた。

蜘蛛の糸の向こう側は、荷物が乱雑に積み上げられている。完全にカモフラージュした、狩場なのだ、ここは。足を踏み入れてしまったのが運の尽きだ。

「っ——!?!」

とうとう、恐怖で足がもつれた。コンビニの袋は遠くまで飛んでいき、開けっ放しの鞆からは荷物が綺麗に零れていく。

『キュ、イイ』

すぐ背後から、声と形容しがたい鳴き声が聞こえた。ああ、転んでいる暇なんてない。逃げなくては。せめて携帯と……。

(アレ、だけは……)

鞆から飛び出している、一冊の本。古めかしく、シンプルな表紙の本。それだけは手離したくない。それだけは、絶対に。

急いで本を拾い上げる。そしてまた駆け出そうとして、勢いよく前に倒れることになった。足が動かない。いや、固定されている。見れば、蜘蛛の糸が右足に絡みついていた。

そして同時に、視界にシェイドの姿が見えてくる。顔を飲み込むことすら容易そうな、大きな口。複数ある眼がギョロギョロと動いている。口から出ているのは、牙だろうか。噛まれたら死ぬ。否、もう死ぬ。すぐ死ぬ。今死ぬ。

(あ……あ……)

視界が覆われる。ビルも、空も、何も見えない。ただあの大きな蜘蛛だけが見えている。

自分は食われるのだ。これから繭にされ、養分になる。宙ぶらりんになっていた、あの人たちのように。

(いつ、嫌……嫌だ……)

手に持った本を、強く抱き締める。声を上げたくても、悲鳴すらあげられない。恐怖に体が支配されている。

自分は死ぬのだ。何も成さぬまま。何にも成れぬまま。迷惑だけをかけ、生きた証すら残さず。明日は何事もなく、恙^{つがな}無く、回っていくのだ。同級生に悲しまれることもないだろう。ダスクだからと一笑にふされるだろう。彼女もきつと……何も思わないだ

ろう。

ああ、妹も。あの子はこれからどうするのか。ちゃんと生きていけるだろうか。自分のせいとはいえ、この世界で彼女は……。

(死にたく、ない……)

気弱で告白すらできていない。この人生に、意味がない。自分という価値がない。もつと彼女と話してみたかった。昔のように。

もつと自分らしさというものを、探してみたかった。この苦しい世界で、生きること

に価値を見出していかなくてはならなかった。

……ダスクだから、と。そう言っていた人たちを、なんでもいいから、ひっくり返してみたかった。無様じゃなく、格好よく。その姿を彼女に見せてみたかった。

妄想ばかりで、何もできない自分だったけれども。せめて、彼女にだけは。

(……ダスクじゃなかったら)

どうにかなっただろうか。ヒーローのように、格好よくこの場を切り抜けられたらどうか。

なりたい。そうなりたい。格好よくなりたい。ヒーローのようになりたい。死にたくない。

『キューイ——』

鳴き声が、聞こえる。動き回っていた眼が、眩しそうに閉じられていた。光だ。光が漏れている。

(な、なんだ……これ……顔、に……何か……)

最初に違和感があった。次にそれは、異変だとわかった。そして、その異常を正しく理解しようとしている自分に気づいた。

顔を触る。光り輝いていたそれは、次第に失われていく。蜘蛛は眩しさから遠ざかり、距離が開いた。

触り心地は、少々冷たい。無機質なモノ。口元には三日月が描かれていて、目の部分はくり抜かれている。仮面だ。顔を全部覆ってしまうような、仮面が張り付けられている。

(……なんだ、ろう。これ……)

ああ、だが、これは。ふつふつと湧き上がる、この感覚は。まるで自分が自分でなくなるような。否、弱い自分を包み隠してくれるような、この感覚は。

(僕、は……)

立ち上がる。先程まで体はうんともすんとも言わなかったのに、すんなりと。そして足に絡みつく蜘蛛の糸を気にもせず、仮面を触ったまま蜘蛛を睨む。

『俺』は——」

仮面の内側で、三日月のように口が歪むのがわかった。不思議な高揚感。知ってる。ゲームとかでよくある。こんな展開。死にかけてた主人公に、真の力が目覚めるとか、そんな感じのアレだ。

仮面に触れていた右手を離し、目の前にある露を払うように振り抜く。右腕が伸ばしきられるのと連動するかのように、体を黒い煙のようなものが包み込んでいく。

制服は変わり果て。全身黒一色に。余裕のある黒コート。スカーフを巻くようにつけられたマント。そして被せられたフード。そこに彼はもういない。彼だったものは何もない。

「物語の、主人公だ」

伸ばしきった右腕に現れる、背丈よりも大きな鎌。死神。グリムリーパー。彼は正しく、自分以外の何かに、変身したのだ。

不恰好に足掻け

目の前で蠢いているシェイドを見ても、己の身が震えることはない。先程まであれ程死にたくない、恐怖に打ちのめされていたというのに。

(不思議な……感覚……)

大事に抱えていた本を地面にそつと置く。鈍く、そして黒く光る鎌を肩に乗せる形で構える。自分が何をしているのかわからない。ただ、なんだつてできる気がした。何にだつてなれるような気がした。醜く弱い自分は、消えている。

道化師とも死神とも見て取れるその姿。そうだ。己はコレなのだ。いつかアニメで見たヒーローに。物語に出てくる勇者に。お姫様を助ける王子様に。

今ならどんな自分にだつて、なれるような気がしていた。

『足で踏み、糸を舐め、それを織る。亜麻は紡がれ、娘は糸から解き放たれた』

不意に言葉が口から飛び出す。自分の言葉のようで、そうではないような。ただその言葉の内容を、よく知っている。何度も読み耽つたのだ。自分の名前にもある、その童話を。その中のひとつ『糸くり三人女』だ。

紡がれた言の葉が、祝福の祝詞となる。足に絡みついていた蜘蛛の糸が、まるで綿あ

めのように粘着性を失い離れていく。空に浮び上ると、綺麗に整えられた亜麻糸のようになる。

そして、足りない頭で理解した。自分の言葉には、力があるのだと。ただの言葉ではダメだ。足元にある本。自分を形成する一部。それを口にすれば、と。

『キイツ——!!』

眩しさに後退していた蜘蛛が跳躍する。距離は呼吸ひとつもない。その巨体で押し潰そうと、押さえつけようと言うのだろう。恐怖に固まっていた状態ならば、それを避けることは叶わない。だが、今の自分は違う。

「遅いッ」

即座にバックステップで回避する。そして詰め寄ると見せかけ、横の壁に跳躍し、それを蹴って蜘蛛の反対側へと降り立つ。シェイドは見てくれの醜悪さを更に際立てるように、八本の足を別々に動かして旋回する。

向き直ると、蜘蛛が突貫してくる。自分よりも大きなその存在が突っ込んでくるだけでも、背筋がヒヤリとしそうなものだ。車と衝突するようなものだろう。だが、怖くない。

鎌を振り下ろす。しかしすんでのところで蜘蛛は動きを止め、壁に向かって跳ねるとそのまま伝って真上を取られる。そして、強襲。

すぐさまその場から転がるように逃げる。蜘蛛は着地の硬直など感じていないように、素早く追撃に移ってきた。

(……どうすればいい)

あまりにも実戦経験が足りない。初戦闘だ。しかも自分の身に何が起きたのかもわからない。力の使い方は、なんとなくわかる。ただそれで何になる。今でも何か特別なものになれそうだという期待や欲望こそあれ、まだ形として定まっていない。自分自身ではないが、それ以外のものでもないのだ。

(何か、言葉を――)

紡がなくては。普通の言葉では意味がない。あの本を思い出せ。何かしら有益なものがあるはずだ。

蜘蛛の攻撃を避けながら、必死に記憶を掘り起こす。ヘンゼルとグレーテル。白雪姫。死神の名付け親。ものわりのいいハンス。

否、それで効果を発揮しそうなものが思いつかない。

敵は蜘蛛。そして先程から何度も口から吐き出される糸。先程使った糸くり三人女も、蜘蛛の糸を避けるくらいにしか使いようがない。そもそも言葉を紡ぐ時間を稼ぐ必要もある。強力だが、なかなか難しい。

「っ……っ!!」

鎌を横に凧ぐ。しかし蜘蛛はそれを避ける。距離を離すとすぐに糸の塊を吐き出すのだ。それに当たれば自由が奪われる。今度は言葉を紡ぐこともなく喰いちぎられるだろう。当たるわけにはいかない。

(ほんの数秒だけなら、これで……!!)

鎌を全力でぶん投げる。回転しながら蜘蛛に向かっていくのを見つつ、当たるかどうかを確認するよりも早く言葉を紡ぎ出す。どうせ当たりはしない。この隙に唱えるのだ。

『出してくれ。瓶から声が聞こえ、少年が蓋を開けた。飛び出せ、メルクリウス!』
 ガラス瓶の中の化け物。突如として目の前にガラス瓶が出現し、蓋が開かれる。そして中から飛び出した小さな粒は、見る見るうちに巨大化した。超人、悪魔、化け物。そう呼ぶに相応しい巨躯とゴツゴツした肉体。紫色の皮膚。裂けたような口は耳まで届く。

『キイツ』

鎌を避けた蜘蛛がメルクリウスに糸を吐き出す。しかし化け物はそれに動じない。大きく息を吸い込むと、一息に糸を吹き飛ばした。そして両手で蜘蛛を掴むと、勢いよく地面に叩きつける。

(今つ——!!)

飛んで行った鎌を手元に再出現させ、一気に肉薄する。地面で仰向けのまま痙攣する蜘蛛に向かって飛びかかり、空中で回転しながら蜘蛛に向けて鎌を振り下ろした。

手に奇妙な感覚が生じる。それが生物を斬った感覚だと気づくのに、そう時間はかからなかった。蜘蛛の頭から腹にかけて、鎌が切り裂いている。黒色の液体を撒き散らし、やがて煙となつて消えていく。

シエイドに死体は残らない。黒煙となつて消えてしまうのだ。そして宙に吊り下げられていた人々も、蜘蛛の糸が消えると同時に地面に向けて落ちていく。

「メルクリウス！」

叫ぶ。化け物はその声を無視するでもなく、落ちていく人々を救出して地面に寝かした。そして事は済んだと言わんばかりに、再び瓶の中へと戻つて消える。読んだ内容とは異なつたが、その圧倒的な力は頼もしいものだった。

(……………)

自分の手を見る。肉を裂く感覚など知りたくなかったが、知つたところで、だからなんだと言わんばかりだった。気分がハイになつてるせいだろうか。それともこの仮面のおかげなのか。

それか、自分の倫理が壊れてしまっているのか。どれも定かではないが、感覚を消し去るように手を何度も握り直す。

やった。自分はやったのだ。ASFでしか相手ができない、シェイドを倒した。なんてことだ。普段ダスクだからと馬鹿にされてきた自分が、とうとう身の内に秘められた力を覚醒してしまった。

「……格好良さは、程遠いなあ」

ふと、言葉が漏れる。いやいや、初めてにしてはよくやったと褒めてもいいだろう。覚醒した主人公が初めから強いなんてことはない……はずだ。そうだったはず。いやだろう。危機的状况を意図も容易く打破していたような気もする。

そのくせ自分はどうかだろうか。逃げ腰、鈍い判断力、武器は振るっても当たらない。こんな大層な武器を持つてる割には魔法使いロールか。情けないだろう、こんなの。

（……仮面が、外れた？）

不意に顔から零れ落ちるように、仮面が剥がれた。それと同時に、身に纏っていた黒装束のような服も消える。なんとか仮面はキヤッチしたが、いざ触り続けていると不思議な触り心地だった。

冷たく、硬い。でもどこか心の内が暖まるような、落ち着くような。そんな感覚がしていた。

（……今更、ASFが来たのか）

遠くから聞こえるサイレン。ASFはシェイドがだいたいどの辺にいるのかを察知

「それで、兄。私のハーゲンは？」

家に帰りつき、自分の部屋へと戻ろうとしたところを呼び止められる。雪音が部屋の扉の影から顔だけ出して如月を睨みつけていた。散髪も整髪もしていない髪の毛は首よりも長い。眼鏡の奥から覗く瞳は濁っているように見える。

今の今までゲームでもしていたのだろう。また煽られでもしたのか、不機嫌そうな顔をしていた。いや、不機嫌そうな顔はいつもの事だが。

「……………、ごめん。多分、転んだ時に……………落とした」

「はあ？ 普通気づくでしょーよこちとらハーゲンを楽しみに屈伸運動繰り返してカロリー消費してたんだよ。なのに転んで落とすただあ？ 流石だな運動音痴クソツタレ兄50メートル走10秒男」

いつものように早口でまくし立てられる。気が動転していて、買ったハーゲンのことをすっかり忘れていた。戦ってる拍子にどこかへ行ってしまったのだろう。コンビニ袋が目に入れば嫌でも思い出していただろうし。

「おいこら何部屋に戻ろうとしてんの。自分の失態のくせにそれを取り返そうともしないのか。流石だね目隠れ陰キャ兄、今どきそんな恰好流行らないよ」

「……あまり容姿に触れないでくれ、コンプレックスなんだから」

わかつたら早く行って。そして後でゲームのサンドバックになれ。そう言つて彼女はまた部屋にこもつてしまう。

仕方がない、と軽くため息をつく。置こうと思つていた鞆を持ち直し、また一階へと降りていく。妹の言うことには逆らえない。こちとらあのシエイドを不思議な力で倒したというのに。格好悪いことこの上ない。

その後、結局如月がハーゲンを買つてこようが不機嫌そうな顔が直ることはなく、罵詈雑言の早口の後、お互い自分の部屋でゲームを通信してボコボコにされた。隣の部屋からは「ざまあみろ顔面コンプレックス野郎」と言葉が貫通してくる。如月は何一つ変わる事なく、格好悪いままであつた。

仮面

朝の学校は昨日のニュースの話で持ちきりだった。なんでも、シェイドの反応が消失したと。ASFが対処するでもなくひとりで消え去った化物は、未だに街の中にいるのか。それとも本当に消えたのか。どこから現れるのか、なぜ現れるのか。それらが一切不明な存在の消失というのは人々に恐怖と好奇心を抱かせる。

(……やっぱり話題になるよね)

如月はいつものように机に突っ伏したまま、耳を澄ませる。なにしろそのシェイドを倒したのは自分であり、しかもダスクと蔑称される出来損ないだからだ。ふつつつと高揚感が溢れ出しそうになるのを、ぐっと抑えつけるのが年頃の少年にはやつとの事だった。

だってそうだろう。不思議な力で化物を倒す、アニメや漫画のヒーローだ。そんな力が自分にあつて、どうして興奮せずにいられるだろうか。

「……如月くん、起きてますか？」

女の子の声が聞こえてくる。面倒そうな顔で出迎えてやりたいが……面倒をかけているのはこちら側だ。起きてます、と返事をして顔を上げる。凜とした佇まいで見下ろ

していたのはクラスの会長であり、また次期会長候補として名の挙がっている優等生。おとしぎり弟切宗、通称シユウさん。同じ年でも年上からでも敬愛され、さん付けされる素晴らしい人……らしい。校内を歩き回るだけで声が上がるといには人気者だ。シヨートカットの女の子……如月の個人的な感想ではロングの方が好みなのだが。

「今日の英語、当てられる番ですよ。課題はちゃんとできましたか？」

「……できてないです」

存在を忘れていた。覚えていたところでまともに解けないだろうが。なにせ頭に叩き込んでおらずに抜け落ちてしまう。最早記憶の欠落だ。そんな如月の面倒を見てくれる……といえば聞こえはいいが、いわゆる〇〇さん係という奴だ。できない子供にはできる子供がついてやる。この素晴らしい人はダスクの面倒を自ら見るとまで言うてのけた本当に素晴らしい人だ。申し訳ないが、偽善者ぶらないで欲しい。居心地が悪くなる。

(……どこにいてもそうなんだけど)

居心地が悪いのは元からだ。そんな渋い顔をする如月を見て、彼女はいつものように英語の教科書とルーズリーフを机に置く。

「では、ちゃんとやりましょう。大丈夫、まだ少し時間はありますから」

「……はこ」

別に彼女から教えを受けるのは苦じゃない。問題は……周りの奇っ怪なものを見るような目が嫌なんだ。今だってそう。見えないところで笑っているんだ。なんでこれくらいのが分からないのって。仕方ないだろう。わからないものはわからないんだ。そう産まれたんだ。ダスクとして、最初っから酷いハンデを与えられているんだから。

「そういえば見ましたか、昨日のニュース」

教科書を広げ、いざ課題へ……となった矢先に彼女はそう尋ねてきた。なんの、と返さなくてもわかる。教室でこれだけ話が拡がっていれば嫌でも耳に入ってくるだろう。

「シエイドが消えたってやつですか」

「そう。皆不安みたいね」

「それは……そうでしょう。今まで反応が消えることは無かったって話ですし」

シエイド駆除率十割。それがASFの実績だ。出たらすぐさま現場に急行し、犠牲は出ても必ず殺しきる。対処は完璧だ。未だに発生源はわかっていないというのが、一番の問題ではあるのだが。

「でもASFが来る前に、反応は消えてしまった。どうしてだと思いますか？」

「どうしてって……言われましても」

困ったように顔を逸らす。どうしてって、そりや僕が倒したからだし。そんなこと言

えるはずもないけれど。

「私たちの学ぶ歴史は、いつだって時代の境目に英雄がいるんですよ」

「……はあ」

「だから思うんです。きつとこれは、ASFではない誰かが退治して、消え去つたのだと。本人は何も求めず、ただ街の中に消えていく。そんなヒーローがいたんじゃないかって」

「……アニメとか、好きなんですか」

「いいえ。でもロマンがあるでしょう。いるんですよ、きつと。これからも人知れずシエイドを倒してまわり、そして発生を止めてくれる。そんなヒーローが。時代の転換点に、私たちはいるのかもしれませんが」

「……あの、申し訳ないんですけど、課題を……」

あら、失礼しました。そう言つて彼女は英語を教えるべく課題のページを開く。短い時間の中で端的に、しかもわかりやすく伝えてくれる。シユウさんの説明は非常に理解しやすい……が、きつと英語の時間には忘れてしまつているんだろう。いつもの事だ。

(……ヒーロー)

その響きは、ほんの少しだけ心地よかつた。鞆の中にはあの道化師のような仮面が入っている。帰宅してから自室で被つてみたが、あの姿にはなれなかつた。シエイドが

近くにいないとダメなのか、それとも別の要因があるのか。なんにせよ、これはおいそれと人に見せられるものではなく、また手放せるものでもない。今命があるのは、間違いないこの仮面のおかげなのだから。

く・く・く・く・く・く・く・く・く・く

時刻は大禍時になる。誰も彼もが自宅の鍵を閉め、強固な雨戸でしつかりと外と内をわけ隔てた。いつシエイドが現れるか分からない。幸いなことに、家の中まで入り込んできたという話はそうそうないという。如月の家も例に漏れず、なるべく静かに時間を過ごそうとしていた。

妹の雪音は完全に昼夜逆転しているため、これから朝までずっとヘッドホンをつけてゲームをしているだろう。両親も1階の部屋にいるはずだ。

(……この仮面、どうやったたらあの姿になれるんだろう)

机に向かいながら、如月が考えることはそれだけだった。あの姿になりたい。自分とは別の何かになりたい。こんなダスクではなく、ヒーローになりたい。しかしいくら仮面を触っても、冷たい感触が返ってくるだけ。紐も何もないソレを顔に被せてみても、落ちてしまう。

どうすればいいんだろうなあ。なんて悩みながらぐつと体を伸ばす。椅子を後ろに倒していくと、膝が机にぶつかった。その拍子に、開けっぱなしの鞆から何かが零れ落ちる。

(……手紙?)

飾り気のない白の封筒。ポストカードサイズのソレの背面には届け人の名前すらない。シールで止められた三角部分だけ赤い。それ以外は綺麗な白。一体誰のものだろうか。

(間違えて入れられた? いつ? いや、そもそもこれは……)

嫌がらせの類ではなからうか。過去の苦い記憶を振り返りつつも、封筒を開ける。中には……真っ黒な便箋が入っていた。折りたたまれていたソレを開くと、パソコンで出力したような綺麗な白文字が目に入ってくる。

最上段に、大きく一言。

『おめでとう』

意味がわからない。なんだか不気味だ。新手の詐欺だろうか。けれどもその下に続いていく文章が、ゴミ箱に捨てようとする手を止めた。

『如月 緑夢。シェイドを倒したダスクの少年。その力の覚醒を、我々は大きく祝福しよう』

鼓動が早まる。思い出せ。あの時、どうして変わったのか。死にたくないって思った。何も成せないまま、何も残せないまま死ぬのは嫌だった。

「——」
ゆつくりと、仮面を顔に近づけていく。

出来損ないのダスクという事実を覆したかった。苦しませてしまった妹を残したままにしたくなかった。生きていくだけで苦しい世界が嫌だった。

「——」
自分以外の、何かに、なりたくない

装着した仮面に、熱が籠っている気がした。開けられている目の穴から、外を見る。鞆の中に隠されていた本が、まるで手に取れと言わんばかりの存在感を放つ。古めかしい本。その表紙には……グリム童話と書かれていた。

昔、好きな女の子から貰った本。未だに諦めきれずにいる、かわいい幼馴染に貰った、大切な宝物。自分の名前にもある、グリムという題名。大切な……人……。

(……そうだ)

死にたくないのも、見返したいのも、無様なまままでいたくないのも。ただひとつの理由に行き着く。

(僕は、ただ……)

……格好つけたかったんだ。

「——ッ」

仮面が顔に張り付く。あれほど感じていた高揚感が、少しずつ覚めていく。部屋着は消え去り、あの黒い装束のようなモノへと変化した。鏡に映る姿は、死神のよう。そこに自分はいない。出来損ないのグリムは存在しないのだ。

(……これが、俺の……)

誰にも真似できない。自分だけの力。グリム童話の話を操るストーリーテラー。そして物語を終わらせる死神、グリムリーパー。そこに彼は居てはいけない。弱い自分は存在してはいけない。ただゆっくりと自分を消していき……誰かになるのだ。自分ではない誰かに。自分ではなれない誰かに。自分がなりたいと思つた誰かに。

『ダスクを超えた英雄になりたまえ』

その文章を反芻させる。なるんだ。なれるんだ。ヒーローってやつに。

それが例え、好きな女の子に振り向いて欲しいと願う格好つけであっても。今ならなんにでもなれるんだ。僕は……ヒーローに……。